

荒廃からの50年

遥かなる遍路

1995年7月1日[土]—9月24日[日]

開館時間—午前10時—午後6時(入館は5時30分まで)

休館日—毎週月曜日(休日にあたるときは翌日)

観覧料—一般200円(160円) 大高生150円(120円) 中小生100円(80円)

()内は20名以上の団体料金 65歳以上の方160円

漂人 1946年

微雨(長野県木曾郡南木曾町妻籠) 1974年

戦時中の作品から民家へ
向井潤吉



不詳(軍用機無線士) 1937-44年頃



世田谷美術館分館

向井潤吉アトリエ館

〒154 東京都世田谷区弦巻2-5-1 TEL 03-5450-9581

戦後50年という節目を迎えた現在、私たちが日常生活のレベルで、戦争が残した爪痕を実感できる場面に遭遇する機会は皆無に等しいと言えるでしょう。

世界から驚嘆の眼差しを向けられながら、私たちは経済的発展を求める社会状況を作り上げてきました。戦禍の記憶は、平和の象徴としての経済的発展の陰に徐々に薄らいできていますが、継承していかなくてはならない何物かを、後世に生きる人々の礎となる何物かを、私たちは残していくことを忘れてはならないでしょう。

向井潤吉先生は先の大戦のさなかに、陸軍の報道班員として中国、そして南方へと巡り、多くの記録画を制作してきました。時代の流れが大きく広がり、多数の画家を記録画制作へ駆り立てた時代だったのです。

向井先生が制作した記録画は殆ど現存しないものの、僅かな資料からこれらを顧みると、激しい戦場風景を描いた作品は少なく、兵士がつかの間の休息に安堵する表情、また戦地となった土地に生きる人々の生活と表情などをとらえた作品が多いことに気づきます。

戦場に赴いて、戦争の実態をつぶさに肌で感じれば感じるほどに、この強大で虚妄な暴力に蹂躪される哀れな人間の悲惨さを、いやがうえにも痛感させられることになった向井先生が、終戦の時に手にしていたのは『民家図集』という本でした。

日本各地に広がる農村風景と草屋根の民家を集めたその図集を、暗い防空壕の中で広げながら、終戦も間近い頃に向井先生は何を想われていたのでしょうか。

向井先生が半生をかけて取り組み続けた“民家作品”を制作するようになったのは昭和20年、まさに終戦の年のことでした。以来、今日にいたるまでの50年間にわたる歳月を、日本各地を脚行しながら、失われいく草屋根の民家の姿を追い求めてきたのです。

戦後において著しく変容した日本の産業構造は、日本の原風景ともいえる山峡に点在する農村の姿も大きく変えてきました。各地の環境と風土がもたらした必然と、その土地に住み続けた人々の人知に育まれてきた民家は姿を消していくことになりますが、向井先生が描き残した作品の数々には、草屋根の民家とともに、これを取り囲んでいた風土がとりこまれ、今を生きる私たちにとって、記録的な意味合いも含んで、かけがえない作品になっています。

そして同時に、戦争という特異な体験を経て、終戦を迎えるまでの道程が、画家・向井潤吉先生のアイデンティティを見いだす重要なプロセスだとすれば、一見平凡で、抒情的な作品と見られがちな先生の民家作品には、戦場における悲惨な人間の死を見続けてきた真摯な一画家の、鎮魂の想いがこめられているとも言えるのではないのでしょうか。

本展では戦時中に戦地において描かれた素描作品をはじめ、戦後の荒廃に呻吟する人々の心情を象徴的に描いた『漂人』(昭和21年)など、戦争体験に基づいた諸作品、そして向井先生の遙かなる廻路とも言える、旅に旅を重ね制作してきた民家作品の数々をご紹介します。



不詳 制作年代不詳



一関の風景(茨城県東茨城郡大洗町) 1975年



不詳(軍人) 1937-44年頃



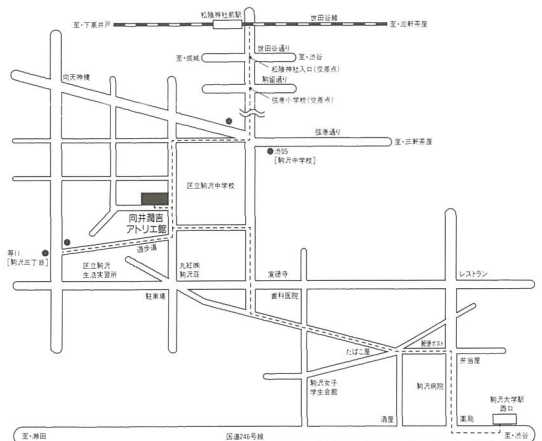
廃屋と残雪 1979年



不詳(軍用機の中) 1937-44年頃



不詳(休息する二人) 1937-44年頃



●最寄り交通機関のご案内

- 東急新玉川線【駒沢大学】 駅西口 下車/徒歩10分
- 東急世田谷線【松陰神社前】 駅 下車/徒歩17分
- 東急バス (渋05) 渋谷～荏菈営業所 【駒沢中学校】 停留所下車/徒歩3分
- 東急バス (等11) 祖師谷折返所～等々力 【駒沢三丁目】 停留所下車/徒歩3分
- 東急バス (渋11) 渋谷～田園調布 【駒沢大学駅前】 停留所下車/徒歩10分
- 東急バス (渋13) 渋谷～砧本村 【駒沢大学駅前】 停留所下車/徒歩10分

世田谷美術館分館
向井潤吉アトリエ館
 〒154 東京都世田谷区弦巻2-5-1
 TEL03-5450-9581